

けいじばん

- 次回活動日のご案内；3月19日曜日9：40 森林館駐車場集合。主な活動メニュー・植物調査（17年度未確認貴重種の調査撮影と早春の植物観察）・林内調査（今後の活動計画検討のため各エリアの現状確認）・シイタケ日除け被覆など。携行品・会報誌1月号添付「今後の活動計画」・会報誌05年8月号添付の豊英島植物リスト・写真班はカメラ。
- ホームページ更新；ホームページを更新しました。上記アドレスの入力困難な方は「ちば千年の森」と入力すれば「ちば千年の森をつくる会」ホームページが閲覧可能です。公民館や図書館のパソコンからも閲覧出来ます。
- 18年度年会費納入；郵便振替口座00160-1-578810「ちば千年の森をつくる会」、年会費1,000円振込み下さい。次回活動日現地で払込可能です。12月4日忘年会参加者は払込済。退会希望者は3月25日迄に連絡下さい。

かつどうのきろく

2月19日曜日 曇 活動報告&総合検討会 於清和公民館 参加会員16名

会発足後初の発表会は新井幹事の会場・プロジェクターなど視聴覚器材、CDデータの動作確認など周到な準備と手際の良い司会進行により、盛りだくさんのプログラムを手際よく消化、充実した発表・総合検討会でした。

◎活動報告の部

- 植物調査（伊藤）；千年の森づくり活動の目的の主要な柱が多様な森づくりである。その中では樹木だけでなく林床植物や昆虫などさまざまな生き物の多様性を目指しており、そのためにはさまざまな環境の継続的なモニタリングが欠かせない。吉原さん指導による会員自らによる植物調査は千年の森の活動をバックアップする重要な活動であり、また多くの会員の楽しみでもある。

2002年の専門家調査で246種類がリストアップされたが、2005年の会員調査では186種類のリストアップであった。再度確認に至らなかった種が数多くあると同時に、新発見の植物が35種に及んだ。これは調査精度を反映していると思われるが、森林施業による環境変化を捉えている可能性もある。今後とも会員調査を続け研鑽に励むとともに、植物を通して豊英島の変化をモニタリングしていくことが重要である。

- コナラ林更新調査（伊藤）；コナラなどの薪炭林の特質は、伐採、利用、再生のシステムが確立した資源循環利用林として長く維持されてきたことにある。概ね20年前後で伐採してその切り株のひこばえを育てる萌芽更新（世代交代）作業を実体験するとともに、その再生過程をつぶさに観察することがコナラの更新作業及び調査の目的である。

調査概要は、1株あたりの萌芽数は17年4月の19.3本が11月には9.3本となり、生存比率は49.3%であった。必ずしも貧弱な萌芽が枯死するわけではなく、11月時点でも樹高は40～127センチとばらつきがあった。また、実生は5㎡あたり21.3本（6月）が19.3本（11月）とほとんど差はなかった。豊英島の表土は薄いこと、日当たりがよく乾燥気味であることなどが原因と思われるが予想より生育が遅く、次世代として残すべき萌芽や実生の決定までいまだ少し時間がかかりそうである。来年も調査を続け、その後の取り扱いを決めたい。

- 自生きのこ調査（村野）；色鮮やかなキノコをアップの写真で紹介しながら次のような説明。05年は降雨量も少なく、きのこの発生量にも大きく影響していた。発生には2回の山があり、1つ目は梅雨の終わった7月とこのシーズンといわれる10月の2回。7月はテングタケ科、イグチ科、ベニタケ科の3種類の発生が目立った。10月は食べられるウラボシ科ホテイシメジ、コウタケ、サクラシメジの発生もみられたが、フウセンタケ科、落葉分解菌の薄茶色の小さなきのこが目立った。ブナ科の樹木の森に発生する外生菌根菌とコナラ等との興味深い共生関係の話も紹介された。豊英島は周囲の清和県民の森やキノコ観察会が催されるどのフィールドと較べても、キノコの種類も量も多いことが質疑のなかで明らかになり、キノコの宝庫の千年の森に改めて感謝の念を抱いた。

- 栽培きのこ収量調査（真鍋）；03年及び04年植菌シイタケ、ナメコ、クリタケ等の月別収量04年から06年2月までの中間報告を表及びグラフで行った。報告に対し（1）適切な調査周期、少なくとも2週1回を維持すること。（2）植菌年月、種類、菌の品種、植菌・伏せ込み方法など明示する標識を現場に表示すること。（3）調査票に植菌年月、種類、ロット区分など予め明記する事。などの改善意見が出された。

○野鳥；トビの巣立ち（高橋）；豊英島のトビの営巣、抱卵、孵化、親鳥の子育て・給餌、ヒナの誕生・成長と習性など画像を見ながら感動的な説明。最後に「ワシタカ類は食物連鎖の中では上位に位置する。その生息は自然環境のバロメーターの一つとなる。そんな野鳥が営巣する地域は‘いい自然環境’。‘野鳥も人も地球の仲間’。森を守りながら野鳥とも仲良くしよう。」という結びは説得力があった。（残念ながら高橋会員の臨場感のある発表を紙面で再現するのは不可能です。詳細はホームページをご覧ください。）

○シンボルツリー（長村）；シンボルツリーの選定作業は05年5月に実施したが、その後「管理番号」や「樹木名」を標示したり、一部の樹木において樹高を調べたりしてきた。このような経緯を振り返りつつ巨木林の整備について考えた。シンボルツリー・プロジェクトの今後の課題として（1）選定作業の継続（2）選定基準の再考（3）今後の管理などがある。

○木工（長村）；今年度の活動において木工班の出番は少なかった。シンボルツリーの樹木名標示板を作成したことぐらいである。発表会においては物置の改修や案内板など18年度のプランを提出した。

◎安全対策

○事故の総括と今後の対策（長村）；9月11日の傷害事故については10月に原因究明や対策案などの報告を行い会員の意見を伺った。その結果をもとに役員会で協議し安全対策の骨子を策定した。基本方針は（1）安全委員の任命（2）整備計画の見直し（3）伐採作業の見直し（4）伐採マニュアルの周知徹底（5）ミーティング・反省会の励行（6）安全講習の実施（7）伐採マニュアルの改定（8）緊急時の対処法の周知など。また、伐採などの整備作業において「他人まかせ」という態度はあってはならないことを確認した。

○安全教育ビデオ「伐木造材作業」（20分）；林業・木材製造業労働災害防止協会が制作した安全教育ビデオを視聴した。伐採の手順や指差呼称など基本的な注意点がよく理解できた。またプロの作業現場は迫力満点であった。

◎今後の活動について

○森林整備計画（坂本）；「千年の森（豊英島）今後の活動計画案」（既配布資料）に基づき次の3点を骨子とする森林整備計画修正案が提案された。（1）落葉広葉樹主体の巨木林の一部にモミ林区域を設けること。（2）コナラ更新林伐採を今協定期間見送る。（3）マダケ林の整備作業を見合わせ、シカ食害状況を見守る。提案に対し活動開始3年経過後の状況に即した修正内容であるとして合意をみたが、次の意見が提起された。（1）林床植物や樹木により適する照度が異なるため、保存したい植物・樹木に照準をあてて照度を調整する。（2）マダケ林の絶滅回避のため、シカによるタケノコ食害防護網等の設置を検討実施する。

○今後の活動について；3年間の活動で森の整備に一定の成果を上げて峠を越えたいま、活動の重点を地域との連携や、森の利活用、調査活動に広げようという方向で次のような提案があり、話し合いを行った。具体的には新年度活動計画に向けて役員会で準備し総会に諮ったうえで実行する。

（1）自生きのこ観察・調査；きのこ専門家の指導と菌類談話会等との連携のもと豊英島のきのこ目録・標本・図鑑の作成や観察会を実施する。このためきのこを探し学ぶメンバーを募り班活動の充実を図る。

（2）栽培きのこ調査の充実；栽培方法を学び質と量の向上を図る。被覆による乾燥防止の効果を検証・実施する。収穫・収量調査の周期、杭表示、調査票なども改善する。地元メンバーを中心に栽培きのこ班の充実を図る。

（3）植物調査活動を充実する。特に貴重種の今年度未確認種については優先順位、季節、調査地点など決め計画的に実施する。貴重種には標識を付ける。分布地点も記録する。植生分布図作成等のため島内地点標示杭を設置する。

（4）ニホンシカの調査；棲息数、定住か島内外移動か、生態、食性、植生への影響など調査する。専門家の指導や会員によるローラー調査も検討。調査企画・実行のためシカ班を編成する。共生か駆除 or 駆逐かは当分保留。

（注1）ニホンシカは千葉県レッドデータブック一般保護生物D（注2）[房総のシカ調査会](#) URL 房総のシカ情報満載。

（5）木工と環境整備；栽培キノコや貴重種の標示、島内位置杭の設置、外来者に備える案内標識、危険立ち入り禁止区域標識、物品置場の整備など島の資材を活用して実施する。

（6）地域・他団体との連携；吊橋の問題から豊英島を不特定多数の一般県民に公開するイベントは出来ないが、豊英島の貴重な自然やその活動が、地域や社会から孤立しないよう、植物やキノコの観察会、森づくり作業、それらの学習を通じて、地域や学校、他団体・企業との連携・交流を工夫し実施する。例えばキノコ観察会共催、キノコ栽培農家研修、自然観察会の共催、子供の自然教室、動物調査などのほか作業安全研修会の共催、炭焼き、近隣諸イベントへの参画等。出来ない事に執着せず、出来ることを実施し、実績を積み上げて豊英島の存在価値を高める。

昼食には新井夫人特製のナメコ・シイタケ汁をご馳走になりました。暖房不足で冷えた体には特に美味しくいただきました。収穫遅れで過乾燥したナメコを1月8日、1月30日雪を掻き分け収穫、一月間保存し、水に戻して調理して下さった丹精込めた森の恵み、一粒も残さず頂きました。一番大変な作業は乾燥し、こびりついた落葉をナメコから一つ一つはがすことだったそうです。ご馳走様でした。

(追記) 乾燥したナメコについては、収穫後どう処理するか、果たして食用に適するのかが心配であったが、そこでまずは①すぐに、水に浸し、戻してゴミを除去し、調理(みそ汁)する。②おおきなごみだけとりさり、乾燥して保存の上、水に浸し、戻してゴミを除去し、調理(みそ汁)する。③おおきなごみだけとりさり、冷凍保存の上、その後水に浸し解凍し、戻してゴミを除去し、調理(みそ汁)する。の3方法で、乾燥ナメタケが食用に耐えるか、ゴミ(へばりついた落ち葉)のとれ具合はどうかを試して見た。結果としてはいずれの方法も大差なく食用に耐える(これは皆さんが昼にいただいたみそ汁の通り)、ゴミの除去は、いずれも結構手間がかかる(少なくとも水に浸し、戻してから一つ一つはがす作業を行い、水替えは4~5回であり)ものの、何とかなることが判明した。以上報告まで。(新井)

○検討会の運営上の課題は、たくさんある報告や提起をいかに効率よく進めるか、個々の発表では発表者の持っている情報をいかに整理し、参加者がそれを受け止め、情報を共有し、共通の認識に至るかであった。発表者は言いたいことはいっぱいあったと思いますが、よく整理していただきました。プロジェクターもビデオも長村さんや村野さんとの事前打ち合わせが功を奏し、効果を上げたと思います。会場が、隣の照明がはいってしまったのが残念。午後は討論もでき、千年の森の今後についての基本的な課題が提起されたとの収穫だと思います。いずれにても今後のためにはもう少し、地元で動ける人、継続して観察等に参加してデータを積み重ねられる体制整備が急務か(新井)

◎ 土釜半兵衛見学記

清和地区(旧三島村・豊英はその一部、旧秋元村)の重要な生産物であった「炭」の生産を、従来の方法で再現し村おこしをしようとして、「半兵衛炭の会」を立ち上げ、すでに3年近くの活動をしている木曾野さん、明石さんたち。今回検討会の後千年の森メンバーが訪問、交流を深めた。

平成15年5月から8月まで、2ヶ月以上かけて、伝統的な手法で本格的な土窯をつき、8月7日に1窯目を出した(この辺の苦労は明石さんが手振り身振りを加えて、熱弁で説明)。約2年半の今年2月24日で実に延べ64窯を生産した。1窯約240キロというから、計15トン以上の炭を焼いたことになる。炭は800度以上の高温で焼くので質もよく飛ぶように売れてしまい、評判は評判を呼び生産が間に合わないとのこと。千年の森の伊藤さんの話では、ここ10年くらいで、県内で数十の釜が作られたが、ほとんどのところは炭を焼いても売れずにいつの間にか熱も冷め・・・とのこと。

半兵衛炭の会には近隣の小学校はもちろん県内はもとより、県外からも視察が絶えず、販売だけでなく社会教育や学校教育にも貢献していきまさに当初の村おこしの目標にぴったりの活動となっている。ホームページへのアクセスもすごい。この辺の秘訣は追々学んでいきたいものである。

代表の木曾野さんは「生産が間に合わず、ボランティア活動のつもりが仕事に追われてしまう。千年の森もせっかく豊英という絶好の場所で活動するのであれば、是非土窯を作って炭を焼いてみたらどうか。今後も交流提携を進めたい。とのことであった。

清和地区では盛期の昭和36年には75,000俵、昭和40年でも45,000俵もの大量の木炭を出荷していたという。樫炭(かしずみ)だと昭和30年代には1俵500円もした、当時大工の職人手間がやはり1日500円。当時、豊英では木炭御殿が次々と建設された(住居の立て替え)。役場になんか勤めるよりずっとよかった。一軒で500俵以上、多い家では1,000俵は出荷した。こう力説する明石さんの目は輝き生き生きしていた。

記念写真を撮り夕闇迫る半兵衛窯を後にした。今後の交流が楽しみである。半兵衛炭の会の詳細はホームページをご覧ください。

(新井記)

